

神尾真由子 3つのJ.S.バッハ無伴奏ヴァイオリン・パルティータ

2020年7月10日（金）19:00開演（18:00開場）会場：ザ・シンフォニーホール

< PROGRAM >

ヨハン・セバスティアン・バッハ
Johann Sebastian Bach (1685-1750)無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第1番 口短調 BWV 1002
Partita for Violin Solo No. 1 in B Minor, BWV 1002

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| I. アルマンド | <i>Allemande</i> |
| ドゥーブル (変奏) | <i>Double</i> |
| II. クーラント | <i>Courante</i> |
| ドゥーブル プレスト (変奏) | <i>Double</i> |
| III. サラバンド | <i>Sarabande</i> |
| ドゥーブル (変奏) | <i>Double</i> |
| IV. テンポ・ディ・ブーレー | <i>Tempo de Bourrée</i> |
| ドゥーブル (変奏) | <i>Double</i> |

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番 ホ長調 BWV 1006
Partita for Violin Solo No. 3 in E Major, BWV 1006

- | | |
|------------------|---------------------------|
| I. プレリユード | <i>Prelude</i> |
| II. ルール | <i>Loure</i> |
| III. ロンド風ガヴォット | <i>Gavotte en Rondeau</i> |
| IV. メヌエット I & II | <i>Menuett I & II</i> |
| V. ブーレー | <i>Bourrée</i> |
| VI. ジーグ | <i>Gigue</i> |

Intermission(20mins.)

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 二短調 BWV 1004
Partita for Violin Solo No. 2 in D Minor, BWV 1004

- | | |
|------------|------------------|
| I. アルマンド | <i>Allemande</i> |
| II. クーラント | <i>Courante</i> |
| III. サラバンド | <i>Sarabande</i> |
| IV. ジーグ | <i>Gigue</i> |
| V. シャコンヌ | <i>Chaconne</i> |

神尾真由子 (ヴァイオリン)
Mayuko Kamio (Violin)

(C) Makoto Kamiya

4歳よりヴァイオリンをはじめ。2007年に第13回チャイコフスキー国際コンクールで優勝し、世界中の注目を浴びた。ニューヨーク・タイムズ紙でも「聴く者を魅了する若手演奏家」「輝くばかりの才能」と絶賛される。国内の主要オーケストラはもとより、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、バイエルン州立歌劇場管弦楽団、ロシア・ナショナル・フィルハーモニー交響楽団、BBC交響楽団などと共演。近年では、ズービン・メータ指揮ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団と南米ツアー、ルドヴィク・モルロー指揮イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団とイスラエルツアーを行った。サン・モリッツ、コルマール、ヴェルピエなどの著名フェスティバル、ニューヨーク、ワシントン、サンクトペテルブルグ、モスクワ、フランクフルト、ミラノなどでリサイタルを行っている。これまで里屋智佳子、小栗まち絵、工藤千博、原田幸一郎、ドロシー・ディレイ、川崎雅夫、ザハール・プロンの各氏に師事。楽器は宗次コレクションより貸与されたストラディヴァリウス1731年製作「Rubinoff」を使用している。大阪府知事賞、京都府知事賞、第13回出光音楽賞、文化庁長官表彰、ホテルオーケストラ音楽賞はじめ数々の賞を受賞。

< PROGRAM NOTES >

柴田克彦（音楽評論家）

今回披露されるのは、ドイツ・バロック音楽の巨匠バッハ（1685－1750）が残した不滅の傑作「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」全6曲中の3曲。同曲集は、器楽音楽の創作に力を注いだケーテン宮廷楽長時代の1720年に浄書譜が書かれており、それ以前に作曲されたことは確かだが、正確な創作時期は判明していない。作曲の目的も不明で、ピゼンデルなどの名手のために書かれた、バッハ自身が弾いたといった見方もあるし、教育面の用途があったともみられている。

ここでバッハは、1本のヴァイオリンを多声的に扱い、旋律と和声の同時表現を企図している。そのため重音奏法を多用し、ポリフォニックな手法を駆使して多様かつ深遠な音楽世界を生み出した。

曲集は各3曲のソナタとパルティータが交互に配置されている。ソナタは、緩-急-緩-急の4楽章から成る「教会ソナタ」の形で構成されているが、パルティータ（これ自体は組曲の一種）は、同じ調性の舞曲が連なる「フランス風組曲」の形。ただし様々な舞曲が自由に配置されており、3曲の構成はすべて異なっている。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第1番 口短調 BWV1002

4つの舞曲が連なる伝統的な組曲の構成ながら、各舞曲の後に「ドゥーブル（変奏部分）」が置かれ、全8楽章の如き形をなしている。なお最後が通常のジグではなくブーレーであるのは、より変奏に適した楽曲を配置したためとみられている。

- I. アルマンド：遅めのドイツ舞曲。付点リズムで進行し、3連音が絡む。ドゥーブルは終始16分 音符で奏される。
- II. クーラント：ここでのクーラントはイタリア風の速めの舞曲で、8分音符が躍動する。ドゥーブル（プレスト）は、やはり16分音符が疾走する。
- III. サラバンド：スペイン由来の荘重な舞曲。重音奏法が多用される。ドゥーブルは 3連音（9/8 拍子の8分音符の連なり）が分散和音風に続く。
- IV. テンポ・ディ・ブーレー：組曲の定型のジグではなく、フランス由来の速い舞曲ブーレーで締められる。キビキビと運ばれ、重音奏法が力感を表出。ドゥーブルは細かな8分音符が連なる。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番 ホ長調 BWV1006

ホ長調の6楽章からなる明るく開放的な作品。プレリュード（前奏曲）を加えて、第1、2番よりも舞曲を多く用いた形は、無伴奏チェロ組曲に近い。バッハは全曲をリュート用に編曲し、プレリュードを2曲のカンタータに転用。単独で有名なガヴォットをはじめ、後世にも複数の編曲がなされている。

- I. プレリュード：ヴィヴァルディ風の快活な音楽。エコー効果が用いられる。
- II. ルール：フランス由来の田園的な舞曲。付点リズムと重音が多用される。
- III. ロンド風ガヴォット：以下2曲もフランス由来の典雅な舞曲。愛らしい主題が5回登場する間に、様々なエピソードが挟まれる。
- IV. メヌエットI & II：優雅な第1メヌエットに、より流麗な第2メヌエットが挟まれる。
- V. ブーレー：活発な短い1曲。ここもエコー効果がみられる。
- VI. ジグ：軽快で華やかな締めくくり。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 ニ短調 BWV1004

単独で頻繁に演奏されるシャコンヌで知られた作品。バロック組曲の4つの定型舞曲に、それら全てと同等の長さをもったシャコンヌが続く形をとる。前半4曲は簡潔で重音も控え目ゆえに、シャコンヌの重層感がより際立っている。

- I. アルマンド：16分音符のなめらかな動きを主体に進行する。
- II. クーラント：3連音と付点リズムの対比が特徴的な速い舞曲。
- III. サラバンド：シャコンヌと関連性をもつ主題による荘重な舞曲。
- IV. ジグ：快速調のイギリス舞曲。16分音符を主体とした躍動的な音楽。
- V. シャコンヌ：元々スペイン起源の舞曲で、その後1つの旋律を主に低音部で繰り返しながら、反復ごとに新展開を遂げる、一種の変奏曲として定着した。ここでは8小節の主題に多声的な30の変奏（他の数え方もある）が続き、中間部はニ長調に変化する。